

《報 告》

看護技術育成の向上を目指した基礎看護学演習の試み ～模擬患者に教員を導入して～

社本 生衣

梶山女学園大学看護学部看護学科

要 旨

本研究は、教員が模擬患者となり学生の看護技術演習に参加した結果、その後の看護技術トレーニングにどんな影響を及ぼしたか、また技術習得状況にどのような変化があったかを明らかにすることを目的に行った。

学生が患者や看護師の役割分担をしてのトレーニングと教員が模擬患者となりトレーニングに参加する2つの方法で全身清拭のトレーニングを実施した。看護技術評価は、精神運動領域と情意領域について技術チェック表を用いて行った。また、教員が感じたままを学生に提示しフィードバックした。

結果、模擬患者役が教員となったことで対象への配慮や関心が高まり、教員が感じたまま伝えフィードバックを行うことは学生が自分の実施した技術を内省し行動の変化を促すことに繋がると示唆された。

キーワード：教員 模擬患者 看護技術トレーニング

I. はじめに

2003年に厚生労働省よりだされた「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会」¹⁾ 報告書や2002年看護学教育の在り方に関する検討会報告書で、看護実践能力の育成に欠くことのできない学習項目として看護基本技術が整理された²⁾。そして、看護基礎教育において、患者の個別性を考慮した実践能力を育成するために学内の技術習得のあり方の検討が必要であると考察されている³⁾。看護技術の教育者は学生が効果的に看護技術を習得できるように授業にさまざまな工夫をしている。看護技術習得には看護技術トレーニングが必要になる。しかし、看護基礎教育において学生がすべての看護技術を授業だけで習得レベルに到達するまでトレーニングすることは難しく、学生は授業後や長期休暇の時間外に学生同士で練習を重ねている。先行研究結果の大半は学生の主体的な反復トレーニングが技術習得の方法として効果が高いと結論づけられている。筆者の研究においても単純に洗髪における「すすぎ」の練習を行ったとき、学生だけで単純に反復トレーニングを行っても「すすぎ」ができるようにならなかったという結果を得ている。学生のトレーニングに教員が授業中以外に関わるのは少なく、学生は主に学生同士かモデル人形を使ってトレーニングを実施している。そして、技術評価はチェックリストを使って行動を評価する客観的なものであり学生が主観的な評価を受ける機会は少ないのが現状である。ドロシーら⁴⁾は、ただひたすら練習を繰り返すだけでは、かえって悪い癖がつく危険性があるとしている。学生同士のトレーニングを実施している学生からは、「学生同士の練習では実際どこまで本当のことを言ってくれているかわからない」「自分も気になること

があっても言えない」「何が大事か具体的に言えない」という意見が聞かれている。

看護技術教育において模擬患者を活用することの効果は1975年にわが国に紹介されて依頼多くの研究が報告され教育的効果は高い。しかし、そのほとんどが専門に教育された模擬患者を活用するものであり教育現場では模擬患者の確保や経費などの問題で活用がなかなかできないのが現状である。模擬患者に教員がなって技術教育を実施した学習効果についての先行研究は見当たらない。効果的な学習環境とは教員が学生の学びの過程に参加することであるといい、適切な助言やヒントを与えられと学習者の学びが深まり促進される⁵⁾。教員が模擬患者となって参加型学習をし、教員が直接体験したことを伝えることが学生の学びにどのように影響するかを検討するために調査を行ったので報告する。

Ⅱ. 目的

教員が模擬患者となり学生に評価を伝えたことが、その後の看護技術トレーニングにどんな影響を及ぼしたか、また技術取得にどのような変化があったかを明らかにする。

Ⅲ. 研究方法

1. 対象

基礎看護学実習前看護技術自己トレーニングを実施している2年課程定時制看護師養成所3年生37名の学生を対象に調査を行った。

2. 演習方法

学生は3人一組になってトレーニング実施した。学生が患者や看護師の役割分担をしてのトレーニングと教員が模擬患者となりトレーニングに参加する2つの方法で全身清拭のトレーニングを実施した。模擬患者役の教員は2名。技術チェック表を用いて精神運動領域と情意領域の評価を行った。模擬患者役の教員が感じたままを学生にフィードバックした。

3. 調査方法

教員が模擬患者となってトレーニング参加の実施前と実施後に質問紙を配布し回収した。

4. 調査内容

- 1) 基礎看護学実習前看護技術自己トレーニングに関する評価と、田島⁶⁾の評価項目を活用した情意領域の評価を質問紙に回答してもらい集計した。
- 2) 精神運動領域の調査は、評価役の教員により技術チェック表を用いて行った。
- 3) 教員が模擬患者となって技術トレーニングに参加したのちの、技術トレーニングに及ぼしたことや感想を自由記載してもらった。

5. 分析方法

- 1) と2) の調査項目については単純集計をした。3) については内容分析を行った。

6. 倫理的配慮

調査の協力については自由意志によるもので拒否をしても、成績評価に影響しないこと、学生の不利益にはならないことを説明し協力を得た。調査用紙の回収は回収ボックスを置き自由に回収できるようにした。

表1 看護技術自己トレーニングへの参加意識
(単位：%) n:36

	実施前	実施後
積極的の参加している	21.6	32
参加している	40.5	43
どちらともいえない	13.5	8
できたらやりたくない	18.9	10.8
やりたくない	5	5

IV. 結果

1. 回収率

回収率は37名中36名で97%であった。

2. 学生背景

学生の背景は、平均年齢26.8歳、36歳から21歳までの男性5名女性31名ですべて准看護師の免許を持った学生である。36名全員が医療施設に所属し、実務経験がある。

3. 看護技術トレーニングに対する認識

教員が模擬患者となってトレーニングを実施する前は積極的に参加しているが41.2%、参加しているが22.0%、実施後は積極的に参加しているが32%、参加しているが43%で大きな変化はない。参加する理由としては、看護技術をしっかり学びたいからが37%、実際に演習できるからが43%と比較的積極的な意思があった。反対に看護技術トレーニングには参加したくない学生も3割ほど存在している。これらの理由として自由記載には、「指導や助言がすぐに聞けるからやる気がでた」「具体的に表現してもらえたので修正しやすい」「曖昧だったところや自信がなかったところに確認することができ自信が持てた」「できるのでやらなくもいい」といった意見が書かれていた。

4. 看護技術トレーニングに意識していること

教員が模擬患者となってトレーニングを実施する前に「非常に気になっている」または、「かなり気になっている」の割合が高い項目は、「方法は大丈夫か」「手順どおりできているか」が高くなっている。実施後は、「苦痛を与えていないか」「不快を感じさせていないか」の割合が高くなっている。

5. 精神・運動領域について

すべての項目において教員が模擬患者となってトレーニングを実施した後は「できない」が減少している。特に情意領域が関わってくる項目に変化があった。「不必要な露出は避け、プライバシーへの配慮ができる」が実施前にできない評価受けていた学生が40.5%であったのが5.4%に減少して

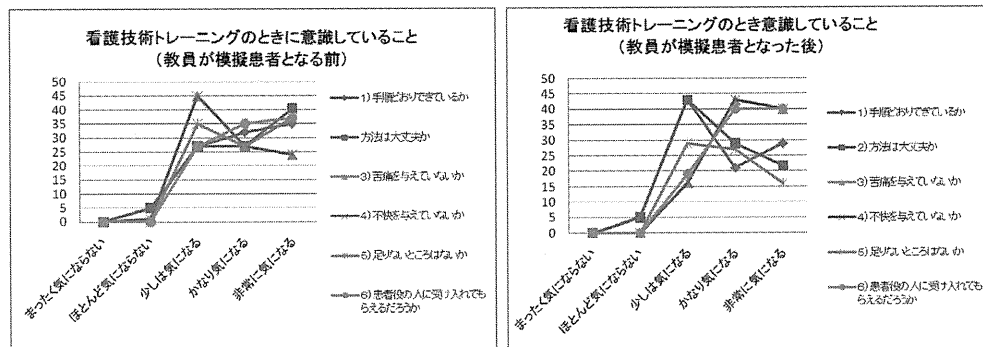


図1

図2

表2

チェック項目		n: 36 単位: %			教員による模擬患者実施前			教員による模擬患者実施後		
		できる	大体できる	できない	できる	大体できる	できない			
1	患者に清拭の必要性と方法をわかりやすく説明できる	13.5	78.3	8.1	40.5	56.7	2.7			
2	必要物品を使い位置に配置できる	27.0	59.4	13.5	54.0	40.5	5.4			
3	患者の準備が適切にできる	8.1	72.9	18.9	27.0	67.5	5.4			
4	湯の温度を適切に準備できる	40.5	54.0	5.4	67.6	35.1	2.7			
5	ウォッシュクロスの使い方が適切である	5.4	86.4	8.1	13.5	81.0	5.4			
6	身体各部の特徴にあわせた拭き方が適切にできる	13.5	72.9	13.5	32.4	59.4	8.1			
7	拭いた後の水分を十分にふき取ることができる	8.1	64.8	27.0	43.2	51.3	5.4			
8	汚れた寝衣をスムーズに脱がせ、背部に綿毛布を敷くことができる	8.1	78.3	13.5	21.6	72.9	5.4			
9	清潔な寝衣をスムーズに着せることができる	13.5	72.9	13.5	35.1	59.4	5.4			
10	不必要な露出は避け、プライバシーへの配慮ができる	8.1	51.3	40.5	27.0	67.5	5.4			
11	患者を疲労させずに時間内にできる	8.1	70.2	21.6	27.0	59.4	13.5			
12	患者に声をかけ、反応を確認しながら実施できる	13.5	59.4	27.0	40.5	54.0	5.4			
13	患者の状態が観察できる	5.4	67.5	27.0	21.6	62.1	16.2			

いる。「患者を疲労させないように時間内できる」が実施前できないと評価を受けていた学生が21.6%であったが実施後13.5%とに減少している。「患者に声をかけ、反応を確認しながら実施できる」が実施前できないと評価を受けた学生が27.0%であったが実施後5.4%に減少している。(表2)

6. 情意領域について

看護技術トレーニング時「自己紹介をしているか」については教員が模擬患者になってトレーニングに参加する前は、まったくしていないが27.6%であった。教員が模擬患者になってトレーニングに

参加してからは、まったくしていないが0%になった。「話をするときには、顔を近づけて顔を見ながら話をしているか」については、教員が参加する前は必ず実施しているが13.5%あったが、教員が参加してからは、必ず実施しているが27.0%、になった。「丁寧な言葉遣いをしているか」については、教員が参加する前は、必ず実施しているが8.0%、ほとんど実施しているが18.9%であったが、教員が参加してからは、必ず実施しているが37.8%、ほとんど実施しているが40.2%になった。「相手が十分言いたいことを表現できないときは、その意味を解して言い換え、お互いに理解しているか」については、あまりしていないが16.2%であったが、教員が参加してからはあまりしていないが5.0%になった。「相手に苦痛や不快を感じないように気にかけているか」については、教員が参加する前はあまりしていないが29.7%、まったくしていないが5.0%であったが、教員が参加してからは、あまりしていないが2.0%、まったくしていないが2.0%になった。自由記載には、「患者さんへの気配りはやっているつもりでしたが表面的な声かけしかできていなかったと反省しました」「手順や方法に集中していると患者さんを置き去りにしていたかも知れません」といったことが記載されていた。

7. 教員が模擬患者になってトレーニングに参加したことについて

「教員が模擬患者になって実施する技術トレーニングは技術習得に役立ちましたか」について、すごく役立った40.0%、まあまあ役に立った35.0%、少し役に立った16.2%、それほど役に立たなかった8%であった。「教員が患者モデルになって技術トレーニングしたことで得たことがありましたか」については、すごくあった27.0%、まあまああった37.0%、少しあった24.0%、それほどなかった10.8%、まったくなかった0%であった。「教員をモデルにして実施した技術トレーニングは学生同士で実施したときに比べて技術の習得に違いがありましたか」すごく違った48.0%、まあまあ違った21.0%、少し違った24.0%、それほど違わなかった5%、まったく違わなかった0%であった。自由記載には、「何をどう直したらいいかがわかった」「先生に迷惑をかけてはいけなとすごく気をつけてやったら上手くいった」「友達同士で練習しているときと大きく変わらない」「緊張するだけで練習にならない」「緊張して勉強してきたことを忘れてしまったので特に役立たなかった」「やるべきことがわかると実際に練習することが楽しくなる」という意見が記載されていた。

8. 教員が模擬患者になってトレーニングに参加したことでの緊張感について

54.0%の学生がすごく緊張した、37.8%の学生がまあまあ緊張した8.1%の学生が少し緊張したと回答している。自由記載には、「すごく緊張したが、練習でも緊張を持ってやったほうがいい」「緊張した中で練習するとほんとに患者さんに実施するときにも失敗しないような気がする」といった意見が記載されていた。

V. 考察

1. 看護技術トレーニングに対する認識

今回対象となった学生は、准看護師の免許を持ち医療施設に属している。実際の業務で清拭を実施している学生もいた。また業務内容に差はあるものの患者との関わりは実践している。学生は実務の中で身につけた応用された方法で実施していたり、医療者主体の進め方や患者への関わりとなっていた。学生同士の技術トレーニングの際には、その点で混乱し身につけてしまった癖が改善できず困っている学生もいた。そのため、看護技術トレーニングに関して興味関心や意欲が比較的高くなっていたと考える。しかし、看護技術トレーニングには参加したくない学生も3割ほど存在している。さら

に「どちらでもない」を含めると4割以上が看護技術トレーニングに対して消極的な姿勢を示していた。これは、実務で身につけて満足していた、あるいは今更修正することの煩わしさを感じていたとも考えられる。しかし、教員が参加後には消極的であった学生が減少し参加したいという思いが高くなった。学習者は「知らなかった」ことを「知った」と感じただけでも学習意欲が増す⁷⁾。自分の技術に対する評価を正しく受け入れたこと、また修正すべき点や練習していく上でどう修正すべきかといった具体的な課題を実感することができたこと、さらに自分の行っている技術に不安を感じていたことに自信が持てたことが関心や意欲を上昇させていったのではないかと考える。

2. 精神運動領域について

今回、教員が模擬患者となって参加する前にも何度か友達同士で練習していた。それでも「できない」との評価がついているものが多くあった。しかし、教員が模擬患者となって看護技術トレーニングを実施した後はすべての項目において「できない」の評価が減少している。知識として学んだ技術は、反復トレーニングをすることで実践可能な技能に転ずる⁸⁾。実践可能な看護技能は、多くの経験を経て習得されていく。指導のもとでの経験は、学習者の発達と変化を促進する。また、学習者に反省を促しフィードバックを行うことで効果的な練習になる⁹⁾。教員が模擬患者になって感じたことを伝えまた意図的に質問して知識と統合を図りながら練習を繰り返す中で学生は、自分の行った行動を具体的に思い起こすことができ何をどのように代えたらいいのかに気づくことができたことで行動の変化に繋がったのではないかと考える。

4. 情意領域について

看護技術における情意領域では、クライアントへの配慮・価値観、現象への興味・関心、学修の習慣などを評価対象にする¹⁰⁾。教員が模擬患者となって看護技術トレーニングに参加した後、「あまり実施していない」や「まったくしていない」という学生が激減している。この項目は、教員が模擬患者になったことで一番助言をした部分である。学生は学生同士の看護技術トレーニングでは行動の流れをひたすら練習する。友達同士ということで照れや馴れ合いで対象への配慮が欠けてしまった可能性もある。また、看護技術トレーニングに意識している点として、教員が模擬患者となって看護技術トレーニングを実施する前は「方法は大丈夫か」「手順どおりできているか」といった手技や手順などを気にかけて練習をしていたことがわかった。これは、学生に提示していたテキストが手順を重視していたものであり、評価もそれに沿って実施していたことが原因ではないかと考える。さらに、モデル人形を使っただけの練習も平衡して実施していたことで対象への配慮が欠けていたとも考えられるが今回の調査では明確にすることはできない。しかし、教員が模擬患者となって看護技術トレーニングに参加してからは、「苦痛を与えていないか」「不快を感じさせていないか」といった対象に視点が向いている。さらに、精神運動領域のチェックリストにおいても対象者の配慮が必要な項目が大きく「できる」へ変化している。模擬患者役が教員となったことで何か間違っただけで苦痛を与えてしまっていたという恐怖感からということはないが、学生同士では気にかけることが少なかった対象への配慮の向上に繋がったのではないかと考える。

5. 教員が模擬患者となって看護技術トレーニングに参加することの効果

学生は、教員が模擬患者となって看護技術トレーニングに参加し評価をすることで技術習得に役立ったと回答している。教員が遠巻きから観察し指導するのではなく模擬患者になって具体的にフィードバックすることで修正することができ、学生自身も変化したことを実感できたからではない

か考える。Barronら¹¹⁾は「フィードバックは学ぶために極めて重要」としさらに「生徒がフィードバックを最も必要としているのは、ある単元やプロジェクトの学習課題に取り組んでいる過程で自分の思考を修正しようとするときである」といっている。教員が模擬患者になって感じたままの感想や評価をリアルタイムに提供したことは習得にいい影響があったといえる。さらに、効果的な練習には機会的に反復するだけでなく折に触れ経験を振り返る機会を意図的に設けることが必要である³⁾。また、訓練を継続することである教員が模擬患者になることでタイミングを考え適切なフィードバックができたのではないかと考える。

また、教員が患者役になって緊張は多いにあったと考えられるが、練習の中で緊張感を持つことは実践の場での緊張など精神的ストレスの緩和にも繋がるのではないかと考える。学生は自分の力で成長する力を持っている¹²⁾。小さな成功や達成感を積み重ねることで学生は自信が持てやる気も高まる。小さな変化を学生に伝えることができるのも教員が模擬患者をとって看護技術トレーニングに参加する役割ではないかと考える。

VI. 今後の課題

今回、教員が模擬患者となって技術トレーニングに参加し技術評価を行った。学生は、精神運動領域だけでなく情意領域でも成長することができた。しかし、今回の教員の働きかけだけで学生に変化を与えることができたかは明確にすることはできない。今後は、いつ・どんな働きかけが学生の技術習得に影響を及ぼしているのかを明確にし体系化することが必要と考える。また、教員自身も患者役になることで学生の行動から教育方法や関わり方を内省することができた。今後は、教員という立場での模擬患者としての資質の向上や実践能力を測定・評価することのできる能力も明確にしていくことが必要と考える。

VII. まとめ

1. 教員が模擬患者となって看護技術トレーニングに参加後には看護技術トレーニングに消極的であった学生が減少し参加したいという思いが高くなった。
2. 7割弱の学生が、教員が看護技術トレーニングに参加したいと意思表示し8割の学生が自分の技術の具体的な評価を受けてみたいと感じていた。
3. 教員が模擬患者になって感じたことを伝えまた意図的に質問してフィードバックを行うことは、学生が自分の行った技術を内省し行動の変化を促すことに繋がると示唆された。
4. 教員が模擬患者となったことで対象への配慮や感心が高まる。
5. 教員が模擬患者をとって看護技術トレーニングに参加することで、小さな変化を学生に伝えることができ学生は自信が持てやる気も高まる。

文献

- 1) 厚生労働省医政局看護課：看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書，2003年3月
- 2) 文部科学省高等教育局医学教育課：大学における看護実践能力の育成の充実に向けて（看護教育の在り方に関する検討会報告書）2002年3月
- 3) 田代ひろみ，門井貴子，水野美香他：基礎看護学実習における看護技術の経験状況と技術修得の課題，愛知県看護大学紀要Vole 11, 51-58, 2005

- 4) Dorothyleonado & Waltrswap 池村千秋訳：「経験知」を伝える技術，ランダムハウス講談社，P48，2009
- 5) 稲垣佳世子，波多野諠余夫：人はいかに学ぶか 日常的認知の世界，中公新書，P118～124，1997
- 6) 田島桂子：看護学教育評価の基礎と実際 第2版 看護実践能力育成の充実に向けて，医学書院，P98～100，2009
- 7) 今井むつみ，野島久雄：人が学ぶということ—認知学習論からの視点，北樹出版，2005
- 8) 川島みどり：看護の技術と教育，勁草書房，p44～46，2002
- 9) Dorothyleonado & Waltrswap 池村千秋訳：「経験知」を伝える技術，ランダムハウス講談社，P268～271，2009
- 10) 杉森みど里，舟島なをみ：看護教育学代4版，医学書院，p134，2006
- 11) Barron et al: Doing with understanding: Lessons from research on problem and project-based learning. *Journal of learning sciences* 7 (3and4): 271-312, 1998
- 12) 村井実：村井実作集2教育の再興，小学館，1988

Study on the approaches of fundamental nursing practice

Ikue SHAMOTO

Sugiyama Jogakuen University School of Nursing

Abstract

This study carried out aim that what kind of influence did students give to nursing skill training after this practice?: what kind of change was there in the technical acquisition situation after this practice?: when the teacher participated in the nursing technology practice of the student as.

The nursing skill evaluation used a skill check list about a psychomotor domain and an affective domain. In addition, I showed it to a student as a teacher felt it and fed back.

Because a teacher became a simulated patient, consequently, student rose consideration and admiration to the object of the nursing. The result was suggested that was particularly connected. And students introspect in one's skill and the action change by a teacher tells to have felt it, and feeding back.

Keywords : teacher, simulated patient, nursing skill training